

Feb. 28, 2009

JEKS (The Japan Electronic Keyboard Society)

News Letter

No.7

日本電子キーボード学会ニュースレター ～日本電子キーボード学会「第4回全国大会」特集号～

目次

1. 日本電子キーボード学会新代表幹事あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・柳田孝義 2
第4回総会報告
2. 第4回全国大会概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
3. 第4回全国大会報告
・あいさつ／万代晋也、吉田泰輔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
・基調講演要旨／神野明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 文責：森松慶子 5
・パネルディスカッションⅠ どのような手法で電子オルガンの社会的認知を高めていくか
／神野明 森下絹代 久米詔子 清水のりこ 西岡奈津子・・・報告：柴田 薫 6
・パネルディスカッションⅡ 多様なニーズに対応する M.L.の指導法と問題点を考える
／柳田孝義 中地雅之 遠藤雅夫 二宮紀子 森直紀・・・・・・・・報告：脇山 純 8
・研究発表 ROOMⅠ／小熊達弥、田崎祐子・金沢素子、森松慶子・・・・・・・・報告：安藤恭子 10
・研究発表 ROOMⅡ／阿方俊、金銅英二、斎藤英美・・・・・・・・・・・・報告：野口剛夫 11
・研究発表 ROOMⅢ／赤津裕子、大串和久、小倉隆一郎・・・・・・・・・・報告：中地雅之 13
・研究コンサートレポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 赤塚博美 14
4. 会員情報
・現代音楽におけるシンセサイザーの活用
～オペラとオーケストラにおける事例～・・・・・・・・・・・・・・・・・・中島百合子 15
5. 事務局からのお知らせ
・学会誌「電子キーボード音楽研究」vol. 4 投稿者募集・・・・・・・・・・・・ 16
・編集後記

日本電子キーボード学会 事務局

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生 1-11-1 昭和音楽大学内 阿方 or 生頼気付

Tel : 044-953-1121 Fax : 044-953-1311

H.P. : <http://www18.ocn.ne.jp/~jeks/> E-mail : jeks@snow.ocn.ne.jp

日本電子キーボード学会新代表幹事あいさつ

柳田孝義（文教大学学長補佐）

このたび、吉田泰輔先生の後任として代表幹事をお引き受けすることになりました。

吉田先生をはじめ、音楽教育の要職におられる諸先生方のご努力によって日本電子キーボード学会は2004年10月に設立されましたが、これまで毎年、全国大会の開催やワークショップなどの研究会を開きその礎が出来上がってきたところでもあります。これまでのご尽力に心から感謝申し上げたいと存じます。

設立されてから歴史も浅く若い学会ですが、会員数は着実に増加していると思います。設立趣意書にあるように、電子キーボードに携わるさまざまな分野の方々の実践や研究がこれまでの個別の活動から、情報を共有し交流することによってより活発に音楽文化、教育活動として展開することの必要性を感じています。そのためには全国のそれぞれの地域で活動されている方々の参加を呼びかけたいと思います。

また日本のデジタル技術、ソフトウェア技術、表現や教育実践の活動は外国の同様の研究機関との交流対象になるべきものであると思います。

微力ではありますが、会員の皆様のご協力によって一歩ずつ前進できればと願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

2008年12月吉日

日本電子キーボード学会

代表幹事 柳田孝義

日本電子キーボード学会第4回総会（2008年11月9日 於洗足学園音楽大学）報告

報告事項：2007年度下半期～2008年度上半期事業報告

2007年度会計・監査報告

2008年度中間会計報告

協議事項：2008年度下半期～2009年度上半期事業案

幹事選出に関する規定と2008～2010年度役員体制について

- ・・・3期連続で幹事に選出できないとする現規定によれば、次回の選挙で7名が入れ替わることになり、円滑な運営に障ることも危惧される。今後最優先課題として対策を講じなければならない。

第5回全国大会開催日時と候補地・・・2009年11月8日 文教大学越谷キャンパス

2008～2010年度幹事

代表 柳田孝義（文教大学）

副代表 下八川共祐（昭和音楽大学）・出田敬三（平成音楽大学）

事務局長 阿方 俊（昭和音楽大学）

幹事 吉田泰輔（国立音楽大学名誉教授）・仁田悦朗（i-moa 音楽教育研究所）・

野口剛夫（昭和音楽大学）・森松慶子（音楽ライター／電子オルガン指導・演奏）・

海津幸子（昭和音楽大学）・初山正博（世田谷区立明正小学校）

第4回全国大会概要

主 催：日本電子キーボード学会第4回全国大会組織委員

と き：2008年11月9日（日） 10時半～18時

と ころ：洗足学園音楽大学（神奈川県川崎市高津区久本2-3-1）

スケジュール

10:00	《 受 付 》		
10:30	ごあいさつ 万代晋也（洗足学園音楽大学副学長） 吉田泰輔（学会代表幹事）		
10:45	基調講演 神野 明（ピアニスト・日本大学芸術学部教授） 電子オルガンによるピアノ協奏曲からみえてくるもの		
11:15	総 会		
12:00	《 昼 食 》		
	パネルディスカッションⅠ	パネルディスカッションⅡ	
	どのような手法で電子オルガンの 社会的認知を高めていくべきか ＜パネラー＞ 久米詔子 清水のりこ 西岡奈津子 ＜アドバイザー＞ 神野 明 森下絹代 ＜司会・進行・記録＞ 赤塚博美 柴田 薫 海津幸子	多様なニーズに対応するML（注）の 指導法と問題点を考える ＜パネラー＞ 遠藤雅夫 二宮紀子 森 直紀 ＜アドバイザー＞ 柳田孝義 中地雅之 ＜司会・進行・記録＞ 小倉隆一郎 富田英也 脇山 純	
14:30	《 休 憩 》		
	研究発表Ⅰ	研究発表Ⅱ	研究発表Ⅲ
	司 会：安藤恭子	司 会：野口剛夫	司 会：初山正博
	① 曲時間即興的作曲法へのお誘い～作品化を通じてメジャーステージへのエントリー～ 小熊達弥	④ 海外に見る一段電子キーボードアンサンブルとその意味するもの～イタリア・チェコ・台湾における演奏事例 阿方 俊	⑦ 幼稚園教諭・保育士養成課程におけるMLによる伴奏づけの授業について 赤津裕子
15:30	② 奏者の立場からエレクトーンオーケストラによるコンチェルトの可能性を探る～10年の活動を通して～ 田崎祐子 金澤素子	⑤ 電子オルガンとパイプオルガンの比較から～必要なもの・必要でないもの～ 金銅英二	⑧ FDを活用したML授業～基礎技能習得に関わる一考察～ 大串和久
16:00	③ 演奏の臨場感を重視した電子オルガンアレンジ～キーボードパーカッションを活用した饒舌過ぎない書法～ 森松慶子	⑥ 中国電子オルガン界の今昔～中国電子オルガン界の成長と日本の立場～ 斉藤英美	⑨ コンピュータ制御によるMLシステムの可能性 小倉隆一郎
16:30	《 休 憩 》		
17:00	《 研究コンサート 》 電子オルガンにおける様々な編曲とアンサンブルの可能性 演奏：洗足学園音楽大学電子オルガン 管楽器 打楽器コース学生 司会：佐藤昌弘 企画・構成・指導：赤塚博美 桑原哲章 三宅康弘		
18:00	《 懇 親 会 》		

（注）MLはMusic Laboratoryの略語で、LL(Language Laboratory)から転用されたもの。電子ピアノなど親機と複数の子機による鍵盤基礎教育やソルフェージュなどに用いられる音楽教室をいう。

第4回全国大会報告

あいさつ

万代晋也（洗足学園音楽大学副学長）

お早うございます。洗足学園音楽大学の万代と申します。本日はこの洗足学園大学によるこそおいでくださいました。日本電子キーボード学会第4回全国大会開催、心からお喜び申し上げます。洗足では研究コンサートにもありますように、電子オルガンアンサンブルに非常に積極的に取り組んでいます。今日は実際のコンサートをお聴きいただければよいのですが、せっかく先生方にお目にかかれたので、日頃私が感じていることを一つだけ、是非聞いていただきたいのです。

私どもの大学では、全学で2000人中、管打楽器が700人、ピアノが400人を占めております。最近、ピアノと管打で電子ピアノによるアンサンブルをはじめました。電子ピアノを8台使い、ピアノコースの学生さん8人と、管打あわせて30名くらいのアンサンブルです。これが学生さんにもピアノコースの先生方にも非常に評判がよいのです。お客様にも楽しいと言っています。もともとピアノコースの学生さんはソロ志向が強く、独奏することしか考えておりません。ピアノコースに400人在籍していても、隣の学生の名前も知らない。それが、このアンサンブルのお陰でピアノ同士はもとより、管打にも仲間が増えました。大きな言い方をしますと、他の楽器との交流を通じて新しい音楽の喜びを発見した、と申しましょうか。これは大変よいことですので、ピアノコースの先生方もこのアンサンブルには積極的に取り組んでいます。

20年以上前に私はヤマハのジュニアオリジナルコンサートを聴きに、ピアノの先生と一緒に渋谷のNHKホールへ参りました。私は楽しかったのですが、ピアノの先生が途中で「耐えられない」とおっしゃって、出てしまいました。いろんな理由があったのだらうとは思いますが、そのときから今まで、ずいぶん変わりました。本学ではピアノコンチェルトでも電子オルガンは欠かせない存在ですし、ほかにさまざまなアンサンブルの中に電子キーボードが入っています。電子オルガンをはじめとする電子キーボードは、単独の楽器としてももちろん魅力的ですが、アンサンブルにこそ、可能性を発揮する余地がたくさんある、と感じております。学会としてのご議論はさらに全体にわたるものであらうと思います。日本電子キーボード学会第4回全国大会を洗足で開催して頂けます事をうれしく感じております。本日が実りある一日であるよう、お祈り申し上げます。

あいさつ

吉田泰輔（日本電子キーボード学会代表）

本日は日本電子キーボード学会会員の皆様、ご多忙にもかかわらずお集まりいただき有り難うございます。先ほど御挨拶いただいた万代先生や赤塚先生はじめ、洗足学園音楽大学の先生方のご配慮でこの小さな学会に大学の施設をお貸しいただき、本当に有り難うございます。

本学会も、準備大会を入れると5回目の大会開催となりました。年々会員が増大して成長、というわけにいかないのが悩みの種ですが、年毎にいろいろの専門をお持ちの方に少しずつご参加いただき、次第に充実しております。既に5年を経過しておりますので、今年をひとつの区切りとして次の5年を第2のサイクルと考えると、もう一段の飛躍が必要で、そのためにしなければいけないこともあります。会員の皆様にも積極的にご参加いただき、さらに充実した学会にしていいただければこれ以上のことはありません。本日のご発表、ご研究の成果、お話を伺って、私自身が次にどうすべきかを考える参考にもさせていただきたく思います。皆様の実り多きご活動を希望して、ごあいさつとさせていただきます。

基調講演要旨

電子オルガンによるピアノコンチェルトから見えてくるもの

神野明（ピアニスト・日本音楽大学教授）

本日この場でお話させていただくのは非常に光栄です。今日は、私が電子オルガンとの共演をさせていただいた経験を元に、思いつくままにお話させていただきます。

私が初めて電子オルガンと共演したのは1991年です。本日非常に大切なお働きをなさる赤塚博美さんのエレクトーン、江尻憲和さんのパーカッションで、仙台市でグリーグのピアノコンチェルトを全楽章演奏したのが最初でした。珍しい編成だということで、テレビ局が取材に来てニュースで流れた、そのくらい画期的なコンサートでした。

赤塚さんはフルスコアをエレクトーンのスプレッドシートに置いて、1人でオーケストラパートの演奏をされた、その技量は大変なものでした。また私は、赤塚さんのスコアに対する真摯な研究態度にも非常に心を打たれました。私自身がスコアに非常に興味があり、高校生の頃にブルックナーの7番に感動し、スコアを買ってきてピアノ用にアレンジし、ひとり悦に入っていた経験もありますので、電子楽器でスコアをアレンジして弾く、ということにもスナリ入っていったのかもしれませんが。グリーグのコンチェルトはその後2台エレクトーンでもやりましたし、3台の電子オルガン、パーカッションに指揮者を立てた形でチャイコフスキーもやりました。この時は名古屋の2000人規模のホールで大々的に致しました。エレクトーン奏者は平沼有梨さん、渡部睦樹さんら、今も大活躍している方達でした。

電子オルガンとの共演でコンチェルトをすることと、オーケストラと指揮者がいるシチュエーションの一番の違いは、奏者同士のコミュニケーションです。指揮者がいる場合、ピアニストは指揮者とやり取りしながら演奏するわけですが、ピアノからは指揮者の全身を見ながら演奏することができません。一方指揮者を立てずにエレクトーン奏者と共演する場合、じかに合図しあいながらの演奏になりますが、お互いに相手の手元は見えないわけです。音が出る瞬間の手の動きが見えないので、基本的には目で合図しあいます。アイコンタクトと、互いの身体の動きで演奏を進めていくのは、室内楽の世界に近いものがありました。こうしたアンサンブル的な要素は、教育という部分にもつながっていくものではないかと感じます。

1993年の8月に、駒場エミナースで私の門下生を動員して、ピアノ協奏曲の歴史と題したコンサートを行い、オーケストラパートはエレクトーンにお願いしました。モーツァルト、ベートーヴェン、ショパン、フランク、チャイコフスキーの作品を取り上げましたが、これだけのコンサートをオーケストラを使ってやろうと思うと、莫大な経費がかかります。練習の日程もせいぜい1日か2日しか組めません。エレクトーンとの共演では、時間をかけて何回も入念な準備ができました。私もそこに立会い、指導したり要望を出したりして、その中で、生徒達がみるみる曲になじんでいく様子を目の当たりにしました。また、普通ピアノの生徒がピアノコンチェルトを勉強する際は、第2ピアノを横に並べて演奏し、楽譜もピアノ用に編曲されたものを用いて、音色については要所要所、イメージだけで語る場合がほとんどなのですが、実際にスコアを使い、エレクトーンからそれぞれの楽器に非常に近い音色が出る中での演奏は、非常に生徒達の音色感の養成に役立ったと思います。もちろん実際の弦や管と全く同じ音が出るというわけではありません。例えば弦の最初のザツという感じや、管の頭のパーンという感じはエレクトーンだとあまり無いな、と思いましたが、全く同じであるほうがむしろおかしいのですし、そういうことはまったく小さなことで、メリットのほうが遥かに大きい、というのが実感でした。そのとき出演した生徒達は、今、第一線で活躍しており、全員がリサイタルを開くことが可能な人材に育ちました。これも、電子オルガンとの共演が、彼らが成長するに当たってひとつの大きなインパクトになったものと私は信じております。

時間が来ましたのでお話を終わらせていただきます。ご清聴有り難うございました。

（文責 森松慶子）

パネルディスカッション I

どのような手法で電子オルガンの社会認知を高めていくべきか

報告：柴田 薫

パネリスト：久米詔子（電子オルガン演奏家・作曲家）

清水のりこ（電子オルガン演奏家平成音楽大学）

西岡奈津子（電子オルガン演奏家）

アドバイザー：神野 明（ピアニスト・日本大学）

森下絹代（電子オルガン演奏家：指導者）

司会・進行：柴田 薫（昭和音楽大学）

記録：海津幸子（昭和音楽大学）

第一部 パネリストの発表と問題提起

第一部では、各パネリストから電子オルガンを活用した演奏活動報告、その活動を通じた社会的な文化交流の事例紹介なされた。

①久米詔子氏（電子オルガン演奏家・作曲家）

- ・ 御自身の演奏活動

自作自演のスタイルで、社会に開かれた演奏会（リサイタル活動、定番となった地元企業の協力によるコンサート、季節の行事のコンサート等）、CD制作を行っている。

- ・ 地元メディア（佐賀新聞・佐賀テレビ等）とのつながりによって演奏活動の量や幅が広がってきた

電子オルガンだからこその創作スタイルであり。そして出来上がった作品・演奏に対して社会からの反応→電子オルガンという先入観のない、通常の音楽としての受容を、実感している

②清水のりこ氏（電子オルガン演奏家・平成音楽大学）

- ・ 御自身の活動について

→オペラでの演奏（ピアノ譜からのオーケストレーション）、合唱のオルガン伴奏、チャリティコンサート取り組み、平成音楽大学での指導等を発表

- ・ 反省を元にしたJ.S.Bach作品に取り組んでいること。

→パイプオルガンを勉強直すことで楽譜からの読み取りがさらに深くなる。

指導者自身が学ぶ姿勢を見せることは学生にも有益か。

- ・ 社会認知の一例→韓国での電子オルガン演奏（オム先生の演奏、新CDを紹介）奏者の演奏する音楽の内容を高め充実させることこそが、電子オルガンの活路となる。

③西岡奈津子氏（電子オルガン演奏家・編曲家）

- ・ アーツ・カンパニーで12年間継続されてきた電子オルガン使用をしたオペラ公演について

→試行の末、2台絵エレクトーンとピアノを使うスタイルに。

→学校公演に限られた時間での苦勞

- ・ 韓国テグにおける電子オルガンを使ったオペラ（ランチ・オペラ）で指導を行った事例。

少ないリハーサル回数等、限られた条件下で一定のレベルの音楽を提供できる人材の教育、アンサンブルのスタイルの固定化・定番化、等によって、オペラを演奏する電子オルガン活躍の場は広がるだろう。共演者（歌手やスタッフ達）に奏者の負担を理解してもらうことも必要。

電子オルガン専門家として、それぞれのプロフェッショナルに特価していくべきだ。

以上の発表を受け、アドバイザー達より、それぞれに対する感想が述べられた。

森下氏「各氏の、真摯で自己鍛錬の賜物である活動に敬意を表したい。それら活動が電子オルガンで音楽することの価値を証明してくれている。」

神野氏「メディアでの露出というのは社会認知に大きく貢献する。そういう機会を持てるということは幸せなことだと思われる。

電子オルガンだから、ということではなく、そこに演奏の音楽的な充実があれば世に出て行くことを感じさせる。」

第二部 「アンケート実行で見えてきたもの」ーフロアとのディスカッション

司会の柴田から、電子オルガン部会の発足からアンケート実行までの経緯説明の後、アンケート設問の内容の解説がされた。本来であればアンケート結果を受けて…の傾向分析等がなされる筈であったが、アンケート回収が思わしくなかった現状を踏まえ、実施方法や設問のあり方・内容の反省となった。フロアからも活発な意見が出され、今後のアンケート再実行に向けて、パネルディスカッションのあり方等を含め、電子オルガンのおかれている状況を考えさせられる展開を見せた。

◎ 電子オルガン部会からのアンケート実施についての意見

- ・電子オルガンが一般にどういう認識をされているか知りたかった。
- ・経費削減やアンケート回答ー回収をスムーズに行うためのweb上での実施。
- ・電子オルガンへの関わり具合で、答えに差があるだろうとの予測。
- ・答えを誘導するような挑発は、あえてとらなかったこと。
- ・各設問の意図の説明。

◎ フロアからのご意見

- ・電子オルガンがおかれている今現在の危機感が伝わってこない。アンケートを取る事に意味があるのか？
- ・モデルチェンジ=悪、という捉え方でなく、変化していくことが当たり前の楽器だという認識を。ポジティブな使い方を奨励する方向に向いていくべきでは…？
- ・楽器開発に際して、演奏者のニーズが反映されにくい現実がある。だからこそ学会で意見を集約してメーカー側に反映させたい。
- ・あえて電子オルガンで。というニーズをどう捉えるのか。経済的な発想からなのか、音楽的な必要性なのか、何が電子オルガンの原点なのかを再認識することも必要。
- ・「認知」自体、どのレベルを対象にするか定義されていない。初歩段階の音楽教育の場なのか、芸術音楽なのか？

パネリスト各位から示されたような、社会的な認知のあり方に希望を感じつつも、それがどのようにすれば普通のことになるか、課題が多いことを再認識させられたパネルディスカッションとなった。今後のテーマの設定にも一石を投じたこのディスカッションが、学会全体の活力となることを期待したい。

パネルディスカッションⅡ

多様なニーズに対応する M.L.の指導方法と問題点を考える

報告：脇山 純

パネリスト：遠藤雅夫（東京音楽大学）、二宮紀子（國學院大學幼児教育専門学校）、
森直記（昭和音楽大学）

アドバイザー：柳田孝義（文教大学）、中地雅之（東京学芸大学）

司会：小倉隆一郎（文教大学）、富田英也（白鷗大学）

記録：脇山 純（平成音楽大学）

M.L.分科会も会を重ねるごとに、様々な活用のされ方が紹介され、分野の広さを再認識することができた。一方で、M.L.活用の分野毎に関心が異なっていることが、明確になり、今後の課題も見えてきた。このことはパネルディスカッションの後の吉田泰輔氏の「M.L.を使うことのメリットは『何を教えるか』によって異なる。今後はポイントを整理しては？」の発言に集約される。

また、研究発表では新しいコンピュータ制御によるミュージックラボラトリー・システムの紹介もあった。タッチパネルなど技術の進歩での操作が簡単になり、グルーブレッスンがより柔軟に運用できるようになり、今後の活用が期待できる。既にある機材を買い換えて導入するための、大きなメリット、活用例を期待したい。

①「和声授業におけるM.L.活用の効用」

遠藤 雅夫氏（東京音楽大学）

「指先に眼を！」をキャッチフレーズにした、独自の授業が紹介された。資料として「キーボードハーモニー」「音楽理論（和声）Ⅰ～Ⅳ」のシラバス、「平行和声の練習」が配られた。氏は従来の和声学のやり方ではなかなかドビュッシーには到達できないと断定。ペーパー和声と決別し近代和声を紙の上だけでなく、弾いて理解、分析することを目指す。（弾かなければ分からない学生が多いとも発言。）「音楽理論Ⅲ」の前期では古典和声、ソナチネの分析などを中心とした授業。後期ではドビュッシーなど近代和声の曲を取り入れた授業が行われていると紹介。アナライズ中心の授業にすべきとも主張された。

赤本（島岡 譲著「和声—理論と実習（1）」）とコードネームの架け渡しになるよう授業を進める。具体的な和声の練習の一例として18種類の和音（C, Cm, Cm7-5, G7, G79, G79-5など）の平行和声の練習が紹介された。理想は即興能力、伴奏能力を鍛えることだが、残念ながらほとんどの学生が達成できないとの現状を述べる。発表後、「数字和声」についてのフロアからの質問に対し、ドイツの数字和声のみを扱い、フランスの数字和声は扱わないと返答。学生が混乱するからという理由であった。

②「M.L.を使用した副科ピアノ指導について」

森 直紀氏（昭和音楽大学）

「M.L.教室の概要」「開講科目と授業内容」「長所」「問題点」「今後の展望」をまとめた印刷物が配布された。すでに2つのM.L.教室を活用しているが、さらに教育効果を高めるため、平成20年8月に「M.L.教室を使用した授業にかかわる検討プロジェクト」を設立し検討を進めている。ポピュラー音楽コースのポピュラーピアノ、ソングライティングなどの授業では「集団」でレッスンが行われている。舞台スタッフコース、バレエコース、デジタルミュージックコースなどコースが多様化して、まったくのピアノ初心者、ピアノを持ってない学生にも対応しなければならなかった現状を紹介。アコースティックピアノでのレッスンが理想だが、初心者を対象とする授業ではM.L.の可能性は

大きく、導入を検討中とのこと。本年度から副科の一部で、個人レッスンをグルーブレッスンにしているが、来年度からはM.L.を使う予定である。

また、レベルの高い学生にもM.L.を使って、さらに高度な授業が行われている。「器楽指導法演習」はレベルの高い学生が対象。「M.L.指導法演習」では集団に対する模擬レッスンが行われている。FD（ファカルティ・ディベロップメント）の一環として、M.L.を使った授業のいくつかを他の先生に公開し、多くの意見をもらい、長所と問題点を把握できたとのこと。

M.L.を使用して指導するには人選が大事で、M.L.卓の使いこなしなどを、いきなり、どの先生にでも任せられるというわけではないと指摘。同大学では3つ目のM.L.教室の開設が予定されている。

③「保育者養成校でのM.L.活用例ーコードネーム奏による伴奏法の習得ー」

二宮 紀子氏（國學院大學幼児教育専門学校）

22年前から保育者養成を実施している。M.L.導入の利点の一つはピアノ練習のつらさを緩和することである。初心者一人で学習するより、集団で教えることにより、一斉に学んで、一斉に長時間練習ができる。平成になって、音楽の授業が削られてきた現在、楽典や和声理論を別に学ぶ時間がなくなった。音楽理論は、音楽実践をサポートするものと位置付け、実践を伴いながら学ぶ（理論の学習の必要性を認識してもらうことも目標）ためM.L.を活用する。

学習の効果を高めるため、ピアノのグルーブレッスンでの課題と連動させ、レッスンの先生との連絡を密にしている。机上の理論ではなく、毎回実感させる授業を実践している。学生をグレードごとに4つのグループに分けてレッスンしている。楽典を含めゼロから教える工夫がいろいろ紹介された。

どの発言者からも指摘されたヘッドフォン使用の授業の弊害は、学生が授業以外の活動をこっそりしていることだ。授業以外の曲の練習、ケータイ、居眠り等で、多くの現場で見られるようだ。

それに対処する為、常に作業（プリントなど）をさせることで注意がそれないように工夫している。コードネームを使い和声を実践している。具体例として「こぎつね」が紹介された。

アドヴァイザーの柳田氏、中地氏が課題を整理、さらにコメントを述べた。

M.L.を使った授業にはグループ対象のもの、個人指導のものとは色々ある。

理論との関連の授業（楽典、和声、アナリーゼ）

基礎技能を指導する授業（ピアノの初歩の指導、伴奏、弾き歌い、初見、移調）

応用能力を高める授業（即興、編曲、アンサンブル、スコアリーディング、ピアノ指導法）

M.L.の電子楽器の限界があるためグランドピアノとの併用が効果的。個人レッスンとの連動をすることで成果を高めることができる。

今後の課題としては、指導者の問題、学生（受講者）の問題、課題・教材の開発（フロッピーディスクなど）などがあげられた。

冒頭述べたように、吉田泰輔（日本電子キーボード学会代表幹事）が、「M.L.を使うことのメリットは「何を教えるか」によって異なる。今後はポイントを整理してはどうか」と提案された。

M.L.の主題からは外れるが、柳田氏の「今の学生は和声の機能が身についてない」との発言に、フロアからは、機能と声の学習の危機と捕らえる意見や、新しい世代の機能感があるのではとの声がある。ロックの世界では3度を省略したパワーコードを使用することがよくある。ドリカム（ドリカムズカムトゥルー）頃から、従来は考えられないコード進行や転調がされ始め、感覚で曲が作られヒットしているとの現状が示された。機能と声感がない状態で、学生はどうやって自分の力で音楽を理解できるのだろうという疑問の声もあがった。現在の学生の育ってきた音楽的背景や受けてきた、また、受けてこられなかった、削られた音楽教育に対する悩める生の声を聞くことができた。

20年3月にあった新しいM.L.システムを試すM.L.部会のようなワークショップの第2回目を開きたいとの提案があがった。

研究発表 Room1

報告：安藤恭子

曲時間即興的作曲法へのお誘い～作品化を通じてメジャーステージへのエントリー～

小熊 達弥 (サウンドインターフェイス)

曲時間での作曲、曲時間での即興という発想で、TV や CD 等の、第一級サウンドに仕上げる手法を展開された。演奏は否定しない、このエレクトーンならばできる、という発表者の言葉に催眠にかけられたとも言えるあつという間の時間であった。

エレクトーンならば、即興的に、楽譜を書かずに時間分で時間の演奏ができると説明された。固定概念に捉われることなく、両手上下鍵盤等分演奏とメロディアスにオブリガートを織り込む等を実践されつつ即興での作曲を披露された。完成度高い楽器ならではの、まさにエレクトーンならではの特権であると言及されている。

作品紹介の中には、生の二胡の音を加えての CD 製作の興味深い録音の事例の発表もあった。上下ペダルパート鍵盤 MIDI データシーケンストラックに録音、マルチトラックアサイン、MIDI データエディット、そこから所要パート独立トラックに展開、他楽器の新規追加録音に至るのである。報告者の私自身が頭の回路を整理しまとめると、この「そっと抱いて」の CD 製作は、全て独立トラックにアサインし、同時マルチトラックのシステムを駆使して、二胡の奏者を迎え、生演奏を追加録音し、また、パーカッションもコンピュータから追加録音されて完成されている。作品の殆どの曲は、曲の時間だけで作曲されており、つまり、即興的に完成度の高いサウンドで演奏したエレクトーン演奏がそのまま完成したものであると発表されている。

音楽を享受するのは録音によるものが大半で、作品の一つである TV 朝日のドキュメンタリーの音楽を見ても、このような自己の音楽蓄積の作品化は、ライブ演奏以上に大切なことであり、その有用性を再確認すべきではないかと論じられている。

奏者の立場から“エレクトーンオーケストラによるコンチェルト”の可能性を探る

～10年間の活動を通して～

金澤 素子(エレクトーン演奏家) 田崎 祐子(エレクトーン演奏家)

ピアノ教育に長年携わりながら、他楽器の伴奏、または室内楽、オペラ伴奏など、ご自身が体験されたことにより、エレクトーンオーケストラに着目され、ピアノを弾く素晴らしさや、アンサンブルの楽しさを子供たちにコンチェルトを通じて体験させたいと、このスタイルを始められた。

日本ピアノ指導協会・コンチェルト部門伴奏者養成コース受講するところからスタートし、子供から指導者まで指導されてきて、今年の12月に行われる演奏会を加えると、のべ400人以上が出演し、演奏曲は70曲以上となるそうだ。初心者に馴染みのあるピアノ曲を編曲したものから、ゲスト演奏者を迎えてのグリーグやラフマニノフといった大曲にも取り組みエレクトーンオーケストラを披露している。この実績をみても、試練と感動の10年間の長い道のりであったとうかがえる。

ピアノ初心者の子供であっても、相手の音を想像しながら、また、聴こえてくる音に耳を傾けながら演奏する経験は、ソルフェージュ能力が養われ、お互いの息づかいを全身で感じ、共演する感動を体験できるだろう。

両氏は客観性が育つ・表現が豊かになる・責任感が芽生えるなど、教育的意義を論じる一方、ピアノ指導者で溢れる昨今ではあるが、指導者自身がコンチェルト未経験者で不安で指導できない課題も抱えている。

また、エレクトーンが何台もある教室も皆無に等しく、レッスン室の中には、オーケストラパートの代わりに使うピアノも含め、ピアノ2台常設されていないのも、現状である。

このスタイルが認められ広まっていく為に、そして後世に残していく為に、高い音楽性を持ち合わせた奏者の育成も重要であると結んでいる。

生演奏の臨場感を重視した電子オルガンアレンジ

～キーボードパーカッションを活用した“饒舌すぎない”書法～

森松慶子(音楽ライター、電子オルガン演奏・指導)

高校合唱部のミュージカル発表の「We're All in This Together」を、ステージアで伴奏するにあたり、目の前で繰り広げられる躍動感ある歌と踊りに、リアルタイム演奏での一体感を求め、臨場感ある編曲を追求したい一念の内容であった。

演奏者や編曲者は、とかく、聴こえるもの全てを、溢れんばかりに表現しようとする。結果としては、一人分以上の演奏に走り多くの情報量の仕込みはするものの、「豪華」にはなるが余裕の無い表現をしかねない。把握できない程の情報の中での演奏は問題もあり、音を詰め込まないと物足りないという感覚が生まれないかという危惧もある。

発表者は、全てを音にする必要はないという発想の転換で、演奏者の息づかいを感じることができ、演奏者から発する音として実感できるよう、オートリズムに頼らずキーボードパーカッションを用いた編曲でリアルタイム演奏に臨まれた。

オートリズム否定論ではなく、使い方や使う側の意識の問題を提起している。

また、生演奏の空間の中で、奏者と聴衆のお互いが、音響として鳴ってはいない“欲しい音”を内なる耳で共に能動的に“聴き”、楽しめる音楽でなくてはいけないと強調されている。さらに、そのような“潜在的な音”を持たない演奏には、創造的なイマジネーションが働く余地が無いと論じている。つまり、奏者・聴衆の両者に“潜在的な音”を感じ取れるような作編曲であるかが重要となるのだ。楽器機能を活かし、音楽を生かす工夫を重ね、説得力のある生演奏を心がけたいと感じた。

普段、贅沢な音源に包まれて演奏するのが当たり前となっている子供たちにも、自分自身にも、編曲次第で、想像力も豊かになる、食育ならぬ音育を、真剣に考えなくてはならないと痛感した。

研究発表 Room 2

報告：野口剛夫

海外に見る一段電子キーボードアンサンブルとその意味するもの

～イタリア・チェコ・台湾における演奏事例を通して～

阿方 俊(昭和音楽大学)

かつて我が国では、ピアノへの導入としてリードオルガンが普及していた。ピアノは高く買えないけれど、その分リードオルガンを弾くことに熱中したという人も多いのではなかろうか。

一方、現在その簡便さから広く普及している一段鍵盤の電子キーボードが、電子オルガンへの導入になるとは考えにくい。むしろ、今後はこの一段鍵盤電子キーボードの可能性を研究して高めてはどうか、というのが阿方氏の主張であった。

その事例として、ローマの歌劇場で、一段鍵盤電子キーボードのアンサンブルによるオペラの伴奏が行われたことや、チェコや台湾でこの楽器を大量に用いてオーケストラのように演奏させようとする試みが、ビデオで紹介された。

その模様は確かに驚きであり、電子キーボードの新しい可能性であると感じられた。ただ、現状では、オペラを安上がりにも上演したり、弦楽器の乏しいオーケストラの代用になっているに過ぎない。当事者がその時点で満足してしまっているとしたら、電子キーボードの可能性が今後高められるのを期待することはできない。かつてリードオルガンからピアノへの移行を可能にしたのと同じような発展が今再び起こるためには、一段鍵盤電子キーボードを用いる人が、妥協ない芸術的理想を持っているかどうかにかかっていると云えるのではないか。

電子オルガンとパイプオルガンの比較から～必要なもの・必要でないもの～

金銅英二（松本歯科大学大学院）

電子オルガンの歴史と魅力を語る金銅氏の発表も、もはや本学会の名物と化した観がある。根本的な氏の主張はぶれることがない。それは、大きな技術的発達を遂げた電子オルガンが、もはやオルガンとしてのあり方を逸脱しているのではないか、という疑問である。

オーケストラ然とした音を出せるようになったからといって、オーケストラの真似ばかりさせてよいのか。電子オルガンが本当の自分の音を求めることをやめてしまったら、この楽器はいつまでもまともな楽器とは言われまい。金銅氏の語り口は徐々に悩ましさを増す。ここで筆者は氏とおそらく同じ思いに襲われる。では、今の電子オルガンに独自の音や個性は見出せるのか。残念ながら、答えは否である。電子オルガンが多様な音を出せば出すほど、個性となりうる音を持つことから遠ざかっていく。このディレンマをいかに克服するのか、と考えれば、絶望的な気持ちにならざるをえない。いっそのこと、楽器の本性に人為的な制限を加えるか、楽器よりも演奏者の個性や魅力を優先して考えていくしか道はないのではないか、と筆者は考えるのであるが、金銅氏からさらにお考えをうかがう機会を望む。金銅氏の電子オルガンに対する基本姿勢は前向きなものであると感じられるが、具体的な希望が見えにくい、という印象を受けた。

尚、当日機材の不備で金銅氏の持参された貴重な視覚資料が十分発表に生かされなかったのは残念であった。

中国電子オルガン界の今昔～中国電子オルガンの成長と日本の立場～

斉藤英美（徳島文理大学）

当日発表を予定していた斉藤英美氏は研究発表の2日前に急逝された。8月下旬にレジュメ原稿をいただいた時の説明をもとに、もし氏が発表していいたら次のような流れの発表であったと推察しながら追悼の意味を込めて報告に代えたい。（阿方 俊）

先の北京オリンピックに象徴されるように、現在の中国はあらゆる面で急速な発展がみられ、電子オルガンもその例外ではない。このことは今まで学会でも報告されてきたが、昨今の発展の源になったのは、1985年に中国の音楽教育の頂点にある中央音楽学院と上海音楽学院に開設されたエレクトーン講師養成コースである。

その講師養成コース開設のきっかけとなったのは、私が出演した上海テレビ局主催のエレクトーンコンサートにあり、この様子を紹介した日本経済新聞の“ニイハオ電子オルガン”をヤマハ音楽振興会の川上源一理事長が読んで、コース開設を決断したという経過がある。

コース開設に伴い日本から後藤将也（中央音楽学院）と日野正雄（上海音楽学院）の両氏が指導スタッフとして駐在した。その指導成果の大きさは、現在の中国電子オルガン界を推進している人たちの多くがこのコースの出身者であることから窺える。

一方、日本においては少子・高齢化やバブル経済崩壊などの社会変化で電子オルガン界はかつての

ような需要がなくなってしまうが、中国も一人っ子政策の影響で日本以上の少子・高齢化社会に突入している。日本が歩んできた道を正しく総括して中国の人たちに伝えていくことが今後の日本の役目であると考える今日この頃である。

研究発表 Room 3

報告：中地雅之（東京学芸大学）

幼稚園教諭・保育士養成課程における ML による伴奏づけの授業について

赤津裕子（竹早教員保育士養成所）

本発表では、特に伴奏付けの学習において ML システムがどのように有用であるかについて、実践のビデオ記録の提示と共に考察された。幼児教育の実習・採用試験・実践においては、子どもの実態に応じた、また各学生の技能の習熟度に応じた伴奏づけが不可欠である。本発表では、ML を活用して、ピアノ学習経験の差に応じて、学生が自身の問題に気づき、それを解決していく具体的な方法が報告された。段階的にきめ細かく課題が設定された指導計画、また技能の違いに応じた様々な伴奏方法を認めあう学生たちの姿が印象的であった。

FD を活用した ML 授業 基礎技能習得に関わる一考察

大串和久（兵庫大学短期大学部）

本発表では、鍵盤楽器基礎技能習得を目的とした、第1学期15回の授業実践において、受講前後に学生に実施したアンケート調査とその考察が報告された。本実践では、参考演奏が収められた FD（フロッピーディスク）を配付し、そのデータのテンポを自由に設定したり、片手のみを再生して練習したりすることなどを可能にしている。バイエル 60 番の学習する際のアンケートでは、95%の学生が FD の有用性を認めており、さらに楽典やコードネームなどの理解に関しても波及効果があったことが報告された。演奏技能のみならず、楽典的な基礎に関しても、段階的に修得できるように学習内容を構成していることが、アンケートからも伝わってくる研究発表であった。

コンピュータ制御によるミュージックラボラトリー・システムの可能性

小倉 隆一郎（文教大学）

本発表では、最新の制御システムを備えた機器の機能とその教育実践における可能性が報告された。2008年3月29日にヤマハ高輪ビルで行われた、本学会のワークショップに関連するものである。本システムは、最大64チャンネルまでのオーディオ信号をデジタル制御できる DME64N が使用され、親機1台につき子機31台の接続が可能である。親機は、タッチパネルで操作でき、学生の個人データ（氏名や出欠）の管理、座席に縛られないグループの自由な組み合わせ、MIDI データの送信、外部音源・映像の操作が可能になる。また、伝送経路がデジタル化されたため雑音が軽減され、より良い音響的環境での学習指導が可能になる。今後、これらの教育実践での活用が、さらに期待される場所である。

研究コンサートレポート

電子オルガンにおける様々な編曲とアンサンブルの可能性

赤塚博美（洗足学園大学）

日本電子キーボード学会第4回全国大会に於ける研究コンサートの模様を報告する。今回は、開催校である洗足学園音楽大学の電子オルガンコースに於ける指導方針を表す内容となった。

電子オルガンコースは、今年創設20周年を迎えたが、創設当時から電子オルガンアンサンブルを積極的に取り上げ、コンチェルトなどアコースティック楽器との共演にも力を入れてきた。今回のコンサートでは、実際の授業の中で行われている内容が、演奏を通して明示されることとなった。

ソロ・デュオ・デュオ+パーカッション・3台の電子オルガン+サクソ・3台の電子オルガン+4台のD-deck+指揮の5つの形態で行われた。

まず初めに、オーケストラ作品からの編曲事例から、《“三角帽子”より終幕の踊り》を演奏。電子オルガンコースの学生は、楽器を演奏するだけでなく、自らオーケストラの譜面から編曲し、レジストレーションを設定する能力が求められる。楽器の持つ身体性を生かす演奏となった。

次にパーカッションとのアンサンブル事例として、D.R. ホルジンガー作曲の《Scootin' on Hardrock》が演奏された。電子オルガンの特長のひとつとして、“ライブ演奏に適した3段鍵盤を持つ電子楽器”が挙げられる。電子オルガンでは、両手足を駆使して取りきれない打楽器パートをいわゆる“打ち込み”で処理することが多いが、今回はよりライブ感溢れる演奏を目指し、打楽器との共演で演奏された。総合音楽大学の長を生かし、学生が自ら演奏者を見つけ、アンサンブルを楽しむというものとなった。

もう一つアンサンブルとして、ソロ楽器とのアンサンブル（コンチェルト）が紹介された。曲は、L.E. ラールソン作曲の《サクソフォンとオーケストラのための協奏曲 第3楽章》。電子オルガンは、独奏楽器であるとともに伴奏楽器でもある。フルスコアをスコアリーディングしながらアンサンブルすることにより、オーケストレーションを立体的に感じながら伴奏をすることが可能になっている。

電子オルガンには、独自のオリジナル作品が少ないことから、演奏者自身が電子オルガン用にアレンジすることが不可欠となっている。オーケストラ作品を再現するようなアレンジもあるが、ここではピアノの作品を電子オルガン2台用にアレンジし、オーケストラの楽器編成に電子音を加えた、電子オルガンならではのサウンドに仕上がっていた。曲のイメージを大切に、想像力を働かせ独自の世界を作り上げていくという学習の過程として紹介された。

最後に大編成のキーボードアンサンブルの事例から、ベートーヴェン作曲“交響曲第7番 第4楽章”が演奏された。通常、音楽大学におけるコンサートでは、2,3台での電子オルガンでアンサンブルすることが多い。しかし、ライブに適し、持ち運びが容易になったD-deckの登場により大編成のキーボードアンサンブルに挑戦することが可能になった。

7台のキーボードアンサンブルとなったが、学生指揮により演奏者全員で音楽を作り上げていく面白さ、素晴らしさを感じながら演奏をしていたようである。それぞれ楽器のフレーズを表現すること、すべての音を聞くことに神経をめぐらせ集中した演奏となっていた。

今回は、ヤマハ株式会社、ヤマハエレクトーンシティ渋谷のご協力により、3台のD-deckをご提供頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。

当日の演奏者

電子オルガン：田代倫慧・桜井麻衣・高野彩香・上遠野未来子・村山憂香里・柿崎俊也・宇野幸希・国井真梨子・神山沙織・勢川愛美・長井里衣・野口由貴・山口拓也

打楽器：関聡・向愛佳・矢藤駿　サクソ：中森智之　指揮：秋本一磨

会員情報

現代音楽におけるシンセサイザーの活用～オペラとオーケストラにおける事例～

中島百合子（ ）

1. オペラにおける事例

平成20年3月15日、東京文化会館小ホールで、日本現代音楽協会主催による三枝木宏行（作曲・台本）のモノログオペラ「赤ずきん」公演にシンセサイザーで参加した。出演は、松尾祐孝（指揮）、新藤昌子（Sop.）、アンサンブル（Fl. Cl. Vn. Vc. Synth.）。

シンセサイザーを含む室内アンサンブルと、ライブ・エレクトロニクス（エレクトロニクス制作協力洗足学園音楽大学音楽・音響デザインコース）で編んでゆくストーリーとそのサウンドは、芸術性、テクノロジーの宝庫といっても過言でない充実した新感覚の作品であった。私は、ヴォーカル・シンセサイザーを担当させていただき、その空間を共有できたことは今までに味わったことのない感動であった。

使用機材であるヴォーカル・シンセサイザーVP-550（ローランド）は、マイクを接続し、歌いながら鍵盤を弾く「歌声」をモデリングするので、奏者である私も、ソリストを活かすフレーズを歌ったのである。言葉では説明しづらいのであるが、和音を弾くとクワイアーサウンドが得られるのである。今回、その機能を作曲者自身が熟知されており、大変効果的で緻密な指示が入念にスコアに書き込まれていることにも驚いた。リハの段階でも作曲者のイメージとヴォーカル・シンセの音使いにズレがなく、相乗効果で魅力を引き出し合っていた。諸機能は、奏者任せになることが多いが、存分に活かされていた。

自分自身の力不足もあり、緻密な強弱変化が、電子オルガンのExpペダルのように表現できなかったことや、ミキサーに制御されていたため本来の音量増減が他のアコースティック楽器とどのようなバランスでの仕上がりになっているかが特殊な編成なだけに大変不安であった。しかし音響スタッフの方々の協力の下、小さなキーボードであるが、精一杯、存在感ある位置づけで作品に貢献できた一例だったと思う。

2. オーケストラにおける事例

平成20年9月27日、本名徹次指揮、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団による「第13回ティアラこうとう定期演奏会」で、武満徹のオーケストラのための「波の盆」全6章をシンセサイザーFantom-G8（ローランド）担当として参加させていただいた。スコアには、シンセの細かい指示はなく、音色ガイドもなかったので全体の響き、どの楽器と絡んでいるかを見極めての音色設定に大変悩んだ。それよりも初めて触れる最新鋭のシンセだけに楽器に慣れ親しんで理解するのが難しく、限られた時間内での仕込み（音色構成、入力）に苦慮した。昨今の目まぐるしい最新機種登場はさておき、作品の意図をふまえた諸機能活用への理解と弾き込む時間（音色の特徴をつかみ、流れの中での音色チェンジのタイミングに慣れる）の確保が重要と感じた。発する音が他の楽器とどのように融合されて客席に届くのが今回も大変気がかりであった。数多くの活用例に接し、「耳」を養うことがいかに大切かを実感しながら、ダイナミックな音空間に違和感なく彩えるスパイス的な役割を果たしていることを願う本番であった。

事務局からのお知らせ

学会誌『電子キーボード音楽研究』 Vol. 4 投稿者募集

学会誌『電子キーボード音楽研究』 Vol. 4 への投稿者を募集しています。詳細はホームページの学会誌投稿規程をご参照の上、事務局までお問い合わせ下さい。

論文原稿締め切り延期

本年度大会

原稿の種別および字数：電子キーボードを用いた音楽の演奏，創作，教育等に関する①研究論文（20,000字以内）、②研究報告（10,000字以内）、③会員の活動報告（5,000字以内）、演奏会批評や書評（2,000字以内）、講習会報告、④会の内外の活動や情報についてのレポート。

投稿者：原則として会員とする。ただし依頼原稿執筆者はこの限りでない。

*ご執筆前に事務局に書式見本をご請求下さい。

《編集後記》